



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500 年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第18回】

石田三成の下で忍城水攻め

1 「石田堤」を史跡公園として整備

JR高崎線に乗って大宮駅から熊谷方面へ向かう。車窓から周囲をみわたすと、限りなく平坦地が続く。吹上駅で降り、鴻巣市が運営するコミュニティバスに乗る。市街地を抜けて「袋」バス停で下車。目的地の「石田堤」の跡を地元の人に聞くと「それなら新幹線が走っている附近にあるよ」の返答。方向を見定めて歩きだすも、それらしき看板がみあたらない。再び地元の人に聞き、やっとたどり着く。

石田堤は戦国時代、豊臣秀吉の武将石田三成が陣頭指揮をとって築堤したことからその名が付いた。当時の堤防が鴻巣市袋から行田市堤根にかけて残っている。鴻巣市は残存する約300㍍を「石田堤史跡公園」として整備し、行田市側は282㍍の残存部分が「石田堤歴史の広場」となっている。いずれも当時の日光裏街道、別名「日光脇往還」と呼ばれる古道沿いにある。

今回はこのうち鴻巣市側の「石田堤史跡公園」を尋ねた。公園内に堤防の断面をくり抜いて造った見学用のシンボルモニュメントがある。外側の階段を上ると、堤防の上に立つことができる。基底部分は幅約20㍍、高さは最大で3.2㍍とされる。説明板によると「完成当時の総延長は約1.4キロで、利根川右岸の行田市白川戸附近から三成が本陣を置いたといわれる丸墓山古墳を横切り、熊谷市久下の荒川左岸に至った」と書いている。

2 忍城攻めに佐竹義宣も参陣

「石田堤」は利根川右岸と荒川左岸まで約1.4キロを繋ぎ、両河川から水を堤防内側に引き入れた。その形状はゆるやかな半円形だったと考えられる。堤防で囲まれた中ほどに忍城（行田市本丸）があった。両河川から引いた水が堤防内側に溜まっていけば、おのずと、水かさが増して城は水没していく。いわゆる水攻めである。

忍城はこの時、小田原北条氏の麾下、成田氏長の居城だった。

豊臣秀吉は九州から西日本の諸大名を制圧し、矛先を関東に向けた。天下統一を狙う秀吉は天正18年（1590）4月、上洛を渋っていた小田原北条氏を討つため小田原城攻略に入った。小田原北条氏5代当主氏直は籠城を決めて小田原城に立て籠もった。この小田原攻め時、当然のことながら北条氏の支城や傘下の有力武将の城も秀吉軍の攻撃対象となった。忍城もその一つだった。

忍城の城主、成田氏長は小田原城に入った。このため一族の成田泰季と嫡男の長親親子が城に立て籠もった。しかし、泰季が急死したため長親が籠城戦を指揮した。ところが、先に小田原城が落城。当主氏直は秀吉に屈服し、高野山へ追放された。これに伴い忍城も開城し、戦いは終わった。注目される点は、忍城水攻めに直前まで伊達政宗と南奥最北端で攻防戦を展開していた佐竹義宣がいたことである。

3 義宣、小田原出陣を決断

佐竹氏20代当主義宣は、人取橋合戦以降、伊達政宗の南進策に苦しめられた。同盟関係にあった会津黒川（福島県会津若松市）の蘆名義広が天正17年（1589）、摺上原の合戦で政宗に敗れた。これを契機に佐竹氏を中核とする南奥諸大名連合軍は瓦解の危機に陥った。須賀川城の二階堂氏も政宗の攻を受け滅亡した。佐竹氏は南奥防衛のため滑津城（福島県西白河郡中村村）で政宗勢と必死の攻防を繰り返していた。

そうした時に宇都宮国綱から一族の小場氏に書状が届いた。『佐竹家譜』収録の書状によると、義宣の度重なる南奥出陣でご苦勞の多いことは分かる、としたうえで次のように記す。「殿下御進発必然候」と述べ、「手合之儀、無御油断様諷諫可有御前候」とある。小田原攻めの参陣に遅れることがないように御前（義宣）に申し上げ、くれ

ぐれも油断をしないで下さい」との内容である。

こうした書状を背景についに義宣は決断した。『佐竹家譜』は天正18年（1590）2月6日の条に「曾て、秀吉公の命を承て、自ら兵を率て相州小田原の役に赴く」とある。同年3月19日の条に「秀吉公相州北条氏征伐の為出京」とある。義宣は秀吉が京を立つ前に動いた。同月29日の条に秀吉が「相州山中城を攻て是を陥る」とある。京都を出て10日で小田原北条氏の支城・山中城（静岡県三島市山中新田）を攻略している。油断していると、遅れをとるところだった。

4 小田原で豊臣秀吉に謁見

出陣前後の義宣について『常陸太田市史』は次のように書いている。「義宣は秀吉より常陸および両総にある北条方の諸城攻略を命じられて帰国し、下野壬生・鹿沼などの城を次々と陥れている」と。『佐竹家譜』が「曾て」と書いたように義宣はかねてより秀吉から北条方の城を攻略しろ、という命令を受けていたとみられる。それゆえ小田原へ向かう途中に急いで宇都宮国綱らと共に北条方に与していた下野国（栃木県）の鹿沼城、壬生城を攻略したのであろう。

『佐竹家譜』は天正18年5月27日の条で「義宣、宇都宮国綱と同く小田原に到て秀吉公に謁見。太刀馬、暑衣、金を献ず」とある。『常陸・秋田佐竹一族』（新人物往来社発行）の著者・七宮淳三氏は、義宣が藤沢に着いたことを確認した石田三成は同行の義宣重臣・東義久に「進物等が見苦しくてはお為然べからず」と指摘する書状を送ったと本の中で述べている。初めて秀吉に会う義宣にとってこの三成からの助言は有難かったのではないかと推測できる。

無事、謁見を果たした義宣は同年六月、忍城攻めを命じられた。秀吉が加藤清正に送った「豊臣秀吉朱印状写」（『行田市史資料編古代中世』収録）に「忍城江者石田治部少輔二佐竹・宇都宮・結城・多賀谷・水谷・佐野天徳寺被相添」と書かれている。これをみると、三成を筆頭に義宣、宇都宮国綱、結城晴朝、多賀谷重経らが忍城攻撃軍だったことがわかる。

5 石田三成と親交深まる

江戸時代、小沼十五郎保道が著したとされる『成田記』は忍城主成田氏の事績をまとめた書物

である。そこに堤防工事の記述がある。「今度新たに堤を築に依て人夫に出る輩にハ壺人二付昼ハ扶持米壺升永樂錢六拾文、夜ハ扶持米壺升永樂錢百文つゝ与ふものなり」と。突貫工事で仕上げようとした様子がうかがえる。大盤振る舞いをして工事人を集めた様子がみえてくる。堤防は5日、あるいは1週間で完成したとも言われている。

忍城水攻めは堤防の決壊などで失敗に終わったとされる。しかし、同年7月、小田原北条氏が降伏した。籠城していた成田長親も忍城を明け渡し、戦いは終わった。この間、義宣は堤防工事に金を投入し、一気に完成させる大胆な戦法を身近に体験した。また、何よりも秀吉側近の三成のもとで一緒に水攻めを戦った経験は貴重だった。義宣はこの戦いで秀吉に繋がる太いパイプを得たと言って過言ではないだろう。

佐竹氏と仙道と南奥北端で戦っていた伊達政宗について『常陸・秋田佐竹一族』は次のように記す。「六月五日、小田原に着いた政宗は底倉（神奈川県足柄郡）に押し込められ、前田利家・浅野長政ら五人から詰問を受けたのち、同九日、ようやく秀吉との謁見をみとめられた」。義宣と政宗の小田原参陣の時間差が、その後、秀吉によって行われた所領安堵に大きな影響を与えることになる。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



石田堤史跡公園内で横断面をみせる石田堤の遺構＝埼玉県鴻巣市袋